第八回育英生入選論文

未来社会の仏教と私

立正大学大学院文学研究科
博士後期課程仏教学専攻
韓　仁　徹
（韓　国）

東西の障壁が崩れ落ち、理念の対立が薄れていく現代に私達は生きている。ここ数年間、世界には予想しなかった出来事が起きて、周囲の環境が変っている。しかし今日私達が肌で感じる社会の空気はどう変っているのか。暴力、憎しみ、また麻薬などで汚染しつつあるのが現状である。それではその原因とも言えるのは何であろうか。互いに不信を懐く風潮、個人主義の蔓延、精神的な彷徨などが挙げられる。しかしそれよりもっと根源的な原因とも考えられることは「愛（アガペー）欠乏」ではないか。すなわち、自己中心主義が満ちあふれていることである。このように精神的な余裕をもたない現代人は実に精神の指導者を必要とする。

前世紀から今世紀にかけて我々は文明の進歩にともない物質的な意味では繁栄を享受している。その反面、心の奥底では孤独感と淋しさを抱いている。常に自分が疎外されているという

意識をもっている。このような状況に対して、私達宗教者は十分認識し、責任感をもたなければならない。

仏教には、多くの人々がもっているこの共通の悩みを救う思想及び実践に関して多様に説かれている。釈尊の悟りを源泉とする仏教の教えは、人間としてどう生きていくべきであるか、すなわち理想的な人間像を示したのである。またその教えの内容には「縁起」をはじめ、「中道」、「四聖諦」、「八正道」などいろいろがある。迷いの苦の世界にいる我々が、いかにその事実を自覚し、またそれをいかに処理すべきかの方法が考察されている。それ故に「慈悲」というすばらしい精神が説かれている。慈悲は「純粋の愛」ともその概念を解釈されるが、それは他人に利益と安楽とをもたらそうと望み、他人から不利益と苦悩とを除去しようと願うことである。すなわち菩薩の精神の基盤となるものである。私はこの「与楽抜苦」の精神こそが、現代人が抱いている苦悩を解放しうるものであると思う。存在するすべてのものは相互依存関係にあるという縁起の道理は、我々に多くのことを教えている。特に人間社会は相互依存する集まりであるという事実を我々はそれほど自覚していないのではないかと思う。互いに許しあい、協力し、助け合う、という慈悲の実践こそが、自分だけを考え、他人のことに目を向けようともしない個人主義に走って行く現代人を救うであろう。釈尊は悟りを開かれて、その悟りを自分一人で享受するものではないと気づかれ、大慈悲の心で多くの衆生のために伝道をされ、悟りに導かれた。多くの衆生の苦痛を自らの苦痛とされ、伝道の活動を続けられ、自らが抱いた理想の社会を実現しようとされたのである。

ところが、その理想の社会とは、寛容と包容性がある「平和」と「平等」の社会を意味する

のではないかと思う。仏教を産み出した当時のインドの厳しい階級差別の社会においても、釈尊は階級制度（四姓制度）を否定しておられた。出家して仏教教団（僧伽）に入った仏弟子は、バラモン、クシャトリヤなどの差別をすることなく、すべて仏弟子として扱い、四姓平等を唱えられたのである。また如来蔵思想は、すべての人間に成仏の可能性が本来備わっていることを認めている。そのほか「一切衆生　悉有仏性」を説いた『大般涅槃経』なども人間平等を説く仏陀の精神にもとづいている。しかし、今日我々の社会において、真の平等の人間関係が行なわれていると言えるのであろうか？　自分の立場は常に正しいと信じながら、一方では他人の立場は認めようともしない光景を私達はよく見かける。それが原因となって争いが生じ、不愉快な関係になることがよくある。このようなわけで今日我々には慈悲の心と、寛容と包容の精神が必要となっている。この精神を養い導くことが私達仏教者に要請される役目であろう。そのために私達は仏教の理論と実践の両面で最も充実しなければならないと思う。理論の面では、釈尊の教えを学び、その真髄を深く理解し、極める必要がある。これを基にして、煩悩や業（行為）によって作り出された誤り、罪悪あるいは不道徳に満ちている世界から理想の世界、すな

わち仏国土（浄土）への道を導く者にならなければならないと思う。またその実践においては大乗菩薩道の根幹である六波羅蜜（布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧）を実践修行することがのぞましいと思う。しかし私達仏教者はよく世間を遠ざかり、生活を放棄するかのごとき実践をいとなむことがある。このようなことも、結局世間の迷妄を抜けきることによって、よりよき生をおくることを目標としたのではなかったのか。すなわち私達の究極の目的は「よく生きること」であると思う。よって私達はもっとこの世間に対して、精神的な依るところとして貢献しなければならない。つまり、多くの人々とその苦しみをともに味わい、その苦痛から立ちあがる智慧を彼らに提示しなければならない。これが未来社会への仏教徒のあり方であると思う。